診察にあたる兼島医師と動物の看護を担当するスタッフ。感染症以外では、糖尿病や肥満など生活習慣病を診ることが多いという。そういう部分でも人間と一緒だ

医療ジャーナリスト
伊藤隼也が行く！
ニッポンの医療現場 第45回

人と動物の共通感染症

ペットは「恋人」ではない 正しい付き合い方が必要

人から動物、動物から人へうつる病気があることをご存じだろうか。「人と動物の共通感染症（Zoonosis）」といい、ペットとの付き合い方が親密になっている今、問題になりつつある。今回は特別編として、この病気の第一人者の獣医師に取材した。

今は「癒やし」を求めペットを飼う時代

かつては、ネズミを捕ったり、家を守ったりするために飼われていた犬猫だが、昨今は癒やしやコミュニケーションを求めて飼うケースがほとんど。犬猫だけでなく、爬虫類などをペットにする人たちも出てきた。飼い主とペットの関係が変わってきたことで、共通感染症である「Zoonosis（ズーノーシス）」に注目が集まるようになった。

小学校低学年の女児は、頭頂部の毛が一部抜け落ち、その部分が赤くただれてきたため、母親とともに近所の皮膚科を受診。アトピー性皮膚炎との診断を受け、ステロイド薬などの治療を続けたものの、一向に治らない。いくつかの病院を転々とし、4件目の皮膚科で皮膚糸状菌（ケルスス禿瘡）による「ケルスス禿瘡」であることが判明した。原因は飼っていた猫のアビシニアンだった。

「アビシニアンは両親からクリスマスプレゼントとして贈られたものでしたが、ペットショップで買った際に眉間に小さな脱毛があった。店員が『人間にはうつらないから、大丈夫』と言ったので、家族もまさか猫からうつったとは思いもよらなかったようです」

こう話すのは、みずほ台動物病院の院長で獣医師の兼島孝氏。Zoonosisの第一人者で、日本感染症学会認定感染制御医という専門資格も持つ。この病気については医療者からも数多くの相談を受けている。

「残念なことは、この女児の場合、結局、医師に猫を飼っていることを伝えるのが遅くなり、それが病気の発見を遅らせてしまったということです。それでも女児は当院が紹介した先の医療機関で、アビシニアンは当院で、抗真菌薬による治療を進めたところ、女児は3カ月後には元の頭皮に戻り、アビシニアンも元気になりました」（兼島氏）

症例に出てきた女児の頭皮。早い段階で感染症の治療ができたら、軽くてすんだ可能性がある

この一件では、アビシニアンを安楽死させる寸前まで話が進んだが、兼島氏の適切なアドバイスで家族が思いとどまった。

「Zoonosisのほとんどは、抗真菌薬や抗菌薬でほぼ100％治ります。しかし、こういう出来事があると、ペットを飼うのを放棄したり、殺してしまったりする。ペットも被害者であり、とても残念なことです。やはり動物が人に、人が動物に感染させる病気があることを知った上で、飼うことが大切なのです」（兼島氏）

ペットを飼っていると病院では伝える

この皮膚状真菌による感染症以外にも、Zoonosisはある。わが国で確認されているものは、鳥によるオウム病、子猫によるネコひっかき病、爬虫類によるサルモネラ症など30～40種類ほどで、基本的に正しい飼い方をすれば予防が可能だ。

ペットの付き合い方で、兼島氏がもっとも懸念しているのは、「恋人のように触れ合う関係」だ。

「オウム病など一部は空気を吸い込むことによる気道感染ですが、ほかの多くの感染は接触で起こります。ペットと口と口を合わせてチューをするとか、顔をペロペロなめさせるとか、口移しで食べものを与えるとかは、感染の原因になるので絶対に避けるべきです」

同じ布団で寝るのはもちろん、寝室を一緒にするのも、場合によってはやめたほうがよいケースもある。寝ている間に、顔をなめられる可能性があるからだ。

爬虫類では、サルモネラ菌による感染を防がなければならない。飼育用の水槽をキッチンのシンクで洗うのは最もやってはならないことで、爬虫類を触った後は、必ず手を洗うことを習慣づける。

「犬や猫は自分の肛門をなめた舌で、飼い主の顔をなめる。動物と人とでは衛生観念がまったく違います。鳥も爬虫類も同じです。ペットを飼ってはいけないということではなくて、人間とは違う生きものであるという意識を持って、付き合ってほしいと思います」（兼島氏）

もう一つ覚えておきたいのは病院のかかり方だ。なかには咬まれたり、引っかかれたりした後、すぐに症状が出るものもあるが、1～2カ月後になってから現れるものもある。風邪だと思っていたら実はZoonosisだったという例もある。

「咬まれたら外科、皮膚に症状が出たら皮膚科、熱や腹痛などがあったら内科で診てもらってください。また、どんな症状にもかかわらず、必ずどんなペットを飼っているかを伝えましょう。ダラダラと熱が続く、治療をしても症状が治まらないような場合は、感染症科を受診するように」

と兼島氏は言う。

動物用のX線検査室。動物はじっとしていないので撮影が大変だという。スタッフの指導は覚悟の上だ

一方、動物もこの感染症から守らなければならない。そのためには動物病院で定期的に検査を受けることが大切だ。アメリカの感染症対策を行うCDC（アメリカ疾病予防管理センター）では、定期検査として年に4回、病院で駆虫することを勧めている。こうすることで糞便から寄生虫の卵が消失するという。

核家族化が進んだ現代では、高齢者世帯や子どものいない夫婦など、ペットが名実ともに家族になっている。人間と共存する関係が深まれば、新たな感染症が出現することも容易に想像できる。今後は医療関係者にとっても、ペットの飼育情報がさらに重要になるのは間違いないだろう。

いとう・しゅんや●医療ジャーナリスト・写真家。国内外問わずさまざまな医療現場を精力的に取材し、患者中心の医療実現のため活動中。テレビ・雑誌・書籍など、多数のメディアでより良い医療のあり方を追求・発信し続けている。http://shunya-ito.tv Twitter＝@itoshunya

転載・盗用禁止

写真／SHUNYA ITO® 取材協力／山内リカ 協力／みずほ台動物病院 http://www.mizuhodai.com